

最新旧型機クロツクアップ・サイリツクス

第十七回公演

に　し　や　た　く　い　つ

二者択一

作・演出／川原武浩

C
A
S
T

【黒】

上瀧

昭吾

【青】

笹本

順子

【赤】

中島

莊太

【桃】

大淵

雄一朗

【緑】

伊藤

綾

【白】

長岡

暢陵

S
T
A
F
F

装置

安部

将吾

照明

出田

浩志

音響

青井

美貴

宣伝美術

岩瀬

幹基

制作

石橋

整

撮影

友山

敬太

闇の中から「問題」と声がする。
明転。

司会者席のような、一段上がった演台に一人の女〔青〕。
平場にはクイズの解答者らしい人々。

【青】 「ゲルニカ」や「泣く女」などの作品で知られる画家ピカソはスペイン生まれである。○か×か。

カウントダウン。

解答者、一斉に「○」のエリアに集まる。

【黒】 常識でしょ。
【赤】 まあ一問目だし。
【桃】 まずは簡単などころから。
【緑】 簡単すぎて、ひっかけ問題じゃないかと思うよね。
【白】 …。

タイムアップの効果音。

【青】 正解は…：○。ピカソは1881年、スペイン南部のマラガで誕生しました。
一問目、一人の脱落者もなく全員正解です。お見事。では、次の問題です。

新たな出題を知らせる効果音。

【青】 問題。「ゲルニカ」や「泣く女」などの作品で知られる画家ピカソの生まれた
スペイン南部のマラガは、現在のアンダルシア州に位置する。○か×か。

カウントダウン。

【黒】 (動かない) その程度なら想定内。
【赤】 まあ、常識だよね。
【桃】 まあまあ、骨のある問題だね。
【緑】 知らないよ、そんなの。そんな地名「アンダルシアにあこがれて」でしか聞いたことないよ。
【白】 …。

【黒】、ジリジリと×の方へ移動。

【赤】【桃】【緑】 もそれを見てか見ずか、×の方へ。

【白】は悩みながら○へ。
カウントダウン：3・2・1
タイムアップ直前に【黒】は○の方へ飛び移る。
【赤】【桃】も反射的にそれを追いかけて○の方へ。
タイムアップの効果音。
一人×のエリアに残される【緑】。

【緑】
ええっ!?

【青】 解答がわかれてしまいました。正解は…○。マラガは現在のアンダルシア州、地中海に面した有名リゾート地・「コスタ・デル・ソル」の中心地です。緑の方、残念。

残念な効果音。

【緑】、隅の方に退場。

【青】 さあ、早くもお一人目が脱落。残り4人での、この問題。「ゲルニカ」や「泣く女」などの作品で知られる画家ピカソのフルネームはパブロ・ルイス・ピカソである。○か×か。

【黒】 面白い問題だね。

【赤】 なるほど、そう来たか。

【桃】 なかなか、骨のある問題だね。

【白】 …。

【白】は×、【黒】は○に、【赤】【桃】は決めかねて境界線上をウロウロ。

【黒】×に変更。

×が多数派になったのを見て、【赤】【桃】も×に。

カウントダウン：3・2・1

【黒】、やはり○に飛び移る。

その動きにつられて【赤】【桃】も○の方に移動。

しかし【黒】は素早く×に戻る。

タイムアップ。

【赤】 ええっ!!

【桃】 なんて!?

【黒】 なかったな。

【青】 解答が真つ二つに分かれてしまいました。正解は…×。ピカソのフルネームは

「パブロ・ディエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ファン・ネポムセーノ・マリーア・デ・ロス・レメデイオス・クリスピアーノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダード・ルイス・ピカソ」です。

【赤】 なんだよ、そのバンクオクの正式名称みたいなのは。

【青】

それはクルンテーパーマハナコーン・アモンラッタナコーシン・マヒンタラア
ユッタヤー・マハーデイロツカポップ・ノッパラッタラーチャタニーブリーロム・
ウドムラーチャニウエートマハーサターン・アモンピマーンアワターンサティ
ット・サッカタットティヤウイサヌカムプラシットですね。
言えてない、絶対言えてない。

【桃】

問。

【青】

では、次の問題です。

【赤】

無視かよ！

【桃】

ガン無視かよ！

【赤】【桃】、諦めて隅の方へ。

【青】

問題。「ゲルニカ」や「泣く女」などの作品で知られる画家ピカソは、臆病者で
ある。○か×か。

【黒】、自信たっぷり○の場所から動かない。

【白】、×へと移動。

カウントダウン…3・2・1

タイムアップ。

【黒】と【白】、それぞれが自信たっぷり○と×に立っている。

【青】

これも答えが完全にわかれました。○と×にそれぞれお一人ずつ。正解なら、
もちろん勝ち抜けです。「ゲルニカ」や「泣く女」などの作品で知られる画家ピカ
ソは、臆病者である。正解は…。

【黒】

○。

【白】

×。

【黒】

○。

【白】

×。何故、そんなことが言い切れる？

【黒】

ピカソは臆病者。みんな、そう言ってる。

【白】

皆が言えよ、それは正しいことなのか？

【黒】

文献も、証言も残ってる。

【白】

それが正しいと、誰が証明する？ 見てもいない、知りもしないことを、どう

【青】

やって正しいと証明することができる？

【青】

正解は…

【青】の声を遮るように、音楽。

DOBERMAN「パブロ・ピカソ」

全
員

スペイン生まれのろくでなし。91歳でくたばるまでに、2回の結婚、3人の妻に4人の子供、何人いるのか数えるのも面倒なくらいの愛人と、数えきれない15万円以上の作品を描き飛ばして、片っ端から売り飛ばして金に換えた大金持ちでろくでなしのボヘミアン。自分で自分のフルネームすら覚えていなかったパブロ・デイエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ファン・ネポムセーノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・クリスピアーノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダード・ルイス・ピカソという長い長い呪文のような名前の男。奴は。

音楽、カットアウト。

【黒】

臆病者だ。

【白】

臆病者なんかじゃない。

再度音楽がカットイン。
暗転。

(シーン0終了)

レストランっぽい環境音楽。

3台ほどのテーブル。

そのうちの一つは空席。

もう一台のテーブルにはメニューを眺める一人の老人(【白】)。

真ん中のテーブルには緊張気味の一人の男(【赤】)

【赤】は。一人で繰り返しなにやらブツブツと呟いている。

そこにギャルソン風の女(【青】)がやってくる。

【赤】(小さい声で)お肉は赤、魚は白、お肉は赤、魚は白。

【青】いらつしやいませ。

【赤】来た！

【青】本日はようこそお越しくございました。

【赤】ああ、はい、

【青】お連れ様、お見えになりませんね。

【赤】あ、ああ、ええ、そうですね。

【青】お待ちになりますか？ それとも何かお飲物でも？

【赤】ワインを。

【青】かしこまりました。どのようなものにいたしましょうか。

【赤】肉料理には赤ですよね。で、魚料理には白。

【青】左様でございます。

【赤】軽めの赤がブルゴーニュ、重めがボルドー。

【青】よく御存じでいらつしやる。

【赤】はい、ソムリエールは全部読みました。

【青】漫画でございますね。

【赤】神の雫も途中まで読みました。

【青】それも漫画でございますね。

【赤】今日のメインは？

【青】本日のメインは、カキとホタテのポワレ・ブルブランソースでございます。

【赤】ブ？

【青】ブルブランソースでございます。お客様。

【赤】カキ？

【青】はい。本日は大分県佐賀関(さがのせき)産の旬の岩牡蠣をご用意いたして

【赤】おります。

【赤】ホタテ？

【青】はい。北海道猿払(さるふつ)産の旬のホタテ貝の中でも大きめのものをじつ

【赤】くりとジューシーに仕上げました、

【赤】カキとホタテ？

【青】はい。

【赤】肉でも魚でもなくて？

【青】貝でございます。

【赤】お肉は赤、魚は白。

【青】左様です。

【赤】え、じゃあ、貝は。貝はどちらかといえば、どっち？ 食感的には肉っぽい？

でも海って意味では魚？

【青】貝は…貝でございますね。肉でも魚でもなく。

【赤】困るんですよ、そういうの。

【青】貝には…さようでございますね。シャンパンなどがでしうか？

【赤】シャンシャシャンパン？

【青】本日のグラスシャンパンは、いささか月並みではございますが、パイパーエド

シックとママ・コルドンルージュをご準備いたしております。

【赤】パ…？

【青】パイパーエドシック、カンヌ国際映画祭の公式シャンパーニュでございます。

ママ・コルドンルージュの方はF1の表彰式、シャンパンファイトで使われているものです。

【赤】あ、あの、待ちます。やっぱり待ちます。連れが来てから相談して決めます。

【青】かしこまりました。

【赤】（緊張して喉が渴いた）あの、すみません、水を。

【青】スパークリングとステイルはいかがしましょう。

【赤】ステイル？

【青】スパークリングは炭酸入り、ステイルは炭酸の入っていない、いわゆるミネラルウォーターでございます。本日は、フランス産と国産のものをご準備いたしております。

【赤】あの、えっと、国産の、ミネラル抜きで。

【青】国産のミネラルウォーターの、ミネラル抜き？…ああ！（小声で）水道水で

ございますね。

【赤】あ、はい、すみません。

【青】かしこまりました。

【赤】あの、すみません、お手洗いは…

【青】こちらでございます。

【赤】、緊張したのか、バタバタとトイレへ。

【青】、【赤】を見送るとバックヤードへ下がろうとする。

と、【白】に呼び止められる

【白】よろしいかな。

【青】お待たせいたしました。

【白】シャンパンをグラスでいただけますかな。パイパーエドシックを。

【青】かしこまりました。

【白】 二杯お願いします。
【青】 二杯：でございますか？
【白】 一杯は、あちらの若者に。
【青】 よろしいんですか？

【白】、頷く。

【青】 かしこまりました。

【青】、バックヤードに戻る途中で、空きテーブルの花瓶の花が萎れているのを見つけ、花だけを抜き取って去る。

【青】 お待たせいたしました。パイパーエドシックでございます。

【白】 ありがとうございます。

【青】 あちらへは？

【白】 (頷く)

【青】、もう一杯を【赤】のテーブルに。

【白】 (グラスを覗き) うむ。良い泡、良い色、良い音、そして良い香りだ。グラスではございますが、ハーフボトルを開けたばかりですので。それは運が良かった。：では、これはあなたに。

【青】 お召し上がりにならないので？

【白】 シャンパンは香りだけで十分。

【青】 ありがとうございます。それでは遠慮なく。(軽く口をつけて)フルーティでゴージャスな泡。まるでキャンヌのレッドカーペットが見えるようです。

【白】 (満足そうに頷く)

【青】 ごちそうさまでした。どうぞごゆっくり。

【青】、空のグラスを手にバックヤードへ。

ブーンと低い音が響く。

【白】 が胸ポケットから携帯電話を取り出す。

【白】、通話のために席を外す。

と、そこに【赤】、戻ってくる。

自分のテーブルに何故かシャンパングラスが置いてある。

【赤】 (シャンパングラスを見て) …？ これ、水じゃないよね。

と、【赤】、空いたテーブルに水の入った透明なグラスっぽい花瓶を発見。

【赤】 あれ？ こっちだったっけ？ まあいいか。

【赤】、その花瓶の置いてあるテーブルに着席。

【赤】、何の疑いもなくその水に口をつける。

【赤】、一気に水を飲み干す。

【赤】 (えずいて) オエツ、オエエエ、まっずうう！

と、そこに花と水道水を持った【青】が戻ってくる。

【青】 おかえりなさいませ。

【赤】 あ、お水、ありがとうございます。

【青】 ありがとうございます…ました？

【赤】 はい。これ。ちよつと生臭いというか、ヌルヌルした感じでしたけど。

【青】 …お飲みになりました、ようですね。

【赤】 あの、なにか？

【青】 (もってきたグラスを差し出して) おかわりはいかがでしょうか？

【赤】 お願いします。

【青】 国産の水道水を、東レの浄水器・トレビノーノにゆっくりと一滴一滴丁寧に通し
まして、カルキや重金属類などの不純物を除いたものがございます。

【赤】、水道水のコップを飲んで…

【赤】 美味しい。さっきのより格段に美味しい！

【青】 そうでございますよね。

【赤】 え？

【青】 なんでもございません。

【赤】 (更に飲んで) いやあ、これ、本当に美味しいです！ 一杯目と全然違いますよ
ね。

【青】 えー、あの、その、一杯目のものはですね、えー、同じく国産の水道水を一昼
夜寝かせたものをですね、えーと、更に植物の力を利用して、バイオテクノロジー
でカルキや重金属類などの不純物を除いたものがございます。アオミドロだら
けの観察池のような青臭いフレッシュな香りと、ヌルヌルした喉越しが特徴でご
ざいます。

【赤】 ああ、なるほど、それでね。

【青】 そうなんです。

【青】、【赤】が持っている花に気付いて…

【赤】 あの、それは？

【青】（目が泳ぐ）ええと、これは、ええと…

【青】、花瓶に挿すはずだった花を【赤】の胸ポケットに飾る。

【青】 お似合いでございますよ。

【赤】 あ、ああ、ありがとうございます。

【赤】、素早くシャンパングラスを持ってきて…

【青】 あと、こちらを。パイパーエドシック。あちらのお客様からです。

【赤】 あちらって？

【赤】、【白】の座っていたはずのテーブルを見るが誰もいない。

【青】 あれ？ えーと、あちらのテーブルに先ほどまで座っていたおしゃったお客様からです。

【赤】 僕に？

【青】 はい。

【赤】 どうして？

【青】 わかりません。

【赤】 ていうか、誰？

【青】 誰とおっしゃられますも。

【赤】 知らない人からもらったものを食べちゃいけないって、ママが。

【青】 そうですね。

【赤】 どんな人？

と、そこに【緑】が入ってくる。

酒にでも酔っているのか、ちょっと動作が雑な感じ。

【緑】、当然のように【白】の座っていた席に座る。

【青】、それには気が付かず…

【青】 そうですね、お酒にお話しそうな…初老の

【赤】 初老？

【青】 ええ、初老の男性です。

【赤】 男性？

【青】 はい。

【赤】（【緑】を見ながら）女装が趣味の？

【青】 はい？

【緑】、【赤】や【青】の居る方に投げキッスとかウインクとか。

【赤】（気味が悪くなった）あの、僕、そういう趣味ないんで。
【青】シャンパンはお好みではありませんか？
【赤】いや、そうじゃなくて。あれ！
【青】あれ？

【青】、振り返り【緑】を発見。

【青】いらっしやいませ。
【緑】いらっしやいました。
【青】お連れ様ですか？
【赤】違います。
【緑】に）お待ち合わせでいらっしやいますか？

【緑】、頷く。

【緑】とりあえず生ね。
【青】かしこまりました。アサヒとキリンがございます。
【緑】男は黙ってサッポロビール。
【赤】やっぱり男！？
【青】なかなか渋いご趣味で。大変申し訳ございません。アサヒかキリンしかご準備
【緑】が。

【緑】じゃあ、生やめてハイボール。
【青】ニッカとサントリーがございます。
【緑】えー、マッサンのほう。
【青】ニッカでございますね。ブラックニッカか竹鶴でお作りできますが。
【緑】トリスで。
【青】ええと、それはサントリーでございます。
【緑】やだ。
【青】はい？
【緑】ニッカのトリスがいい。
【青】ええと。
【緑】ニッカのトリスがいいー。
【青】御冗談…ですよ。
【緑】ないならいらぬー。
【青】とりあえず、お水などいかがでしょうか？
【緑】やだ。
【青】（反対を向いて小声で）うわー、めんどくさー。
【緑】じゃあ、とりあえず生で。
【青】そこに戻りますか？

【赤】、シャンパングラスを手に【青】のところへ。

【赤】 あのと、すみません、これ。
【青】 少々お待ちください。

【緑】 生、エビスね。
【青】 サッポロじゃなくて？

【緑】 え、あんの？ サッポロ？ 男は黙ってサッポロビール。
【青】 あいにくと、アサヒとキリンの二択でございます。

【緑】 じゃあ、生やめてハイボール。：あれ、なんか遠い昔にもこんなことがあった
【青】 ような…。もしかしてこれってデジャヴ？

【青】 ただの無限ループです。あと遠い昔じゃなくて、ほんの数分前です。

【赤】、何か言いたげに周りをウロウロ。

【緑】 覚えてないなあ。まあいいや、ハイボールちょうだい。

【青】 ハイボールのウイスキーはトリスで？

【緑】 そう、トリスで！ 超能力者？

【青】 それほどでも。

【緑】 トリスハイボール、一杯〜！

【青】 トリスはニッカじゃありませんがよろしいですか？

【緑】 ニッカ？ トリスはサントリーでしょ。何言ってるの。ぶはははは。

【青】 (小声で) うわー、死ねばいいのに。

【赤】 あのと、これ、いらぬです。もらう理由もないし。

【緑】 何かね、何でもいいから、シユワつとしたやつ。ソッコー持ってきて。

【青】、【赤】からシャンパングラスをひったくって【緑】に提供。

【青】 どうぞ。

【緑】 速いね。

【青】 お待たせいたしました。パイパーエドシツクでございます。

【緑】 (聞き終わる前に飲み干して) おかわり！

【青】 同じものでよろしいですか？

【緑】 同じの同じの。

【青】 かしこまりました。

【緑】 いやあ、美味しいね、このハイボール。

【青】 ハイボールではなく、シャンパンでございますが。

【緑】 そうなの？

【青】 はい。

【緑】 じゃあ、シャンパンみたいなハイボールみたいなシャンパン、おかわり！

【青】 どちらのことだかわかりませんが、かしこまりました！

【青】、スタスタとバックヤードへ。

【赤】と【緑】が場に残される。

【赤】、チラチラと【緑】を見ている。

【緑】 なに？

【赤】 いえ、なんでも。

【緑】 なんでもなくないでしょ。

【赤】 いや、全然見えないうって思っつて。

【緑】 見えないうって何に。

【赤】 初老にも、男にも。

【緑】 はあ？

【赤】 間違いない、この迫力。見た目は女性だけど、中身はオッサンだ。

【緑】 座れ。

【赤】 え？

【緑】 そこ。

【赤】 あ、いや、でも。

【緑】 座れ。

【赤】 (反射的に) はい。

静寂。

【赤】、沈黙に耐えきれなくなつて…

【赤】 あ、あの、なんででしょうか？

【緑】 (寝てる) Z Z z z z z …

【赤】 え、ええっ？ 寝た？ 寝てる？

【緑】 (寝てた) 寝てない。

【赤】 起きた。

【緑】 (目を覚まして) 誰？

【赤】 はい？

【緑】 あんた誰。

【赤】 名乗るほどのものじゃありませんが。

【緑】 なんて座つてんの。

【赤】 え、だつてさつき座れつて、言いましたよね。

【緑】 誰が。

【緑】 (指す) あなたが。

【赤】 覚えてない。ていうか、ここどこ。

【赤】 レストランです。

【緑】 レストラン？

【緑】居酒屋じゃなくて？
【赤】レストランです。
【緑】なんで。
【赤】その「なんで」の意味が分からない。
【緑】なんでレストランに居るの、私。
【赤】自分から入ってきたんじゃないんですか。
【緑】嘘お。
【赤】方がそれが嘘として、どうして僕がそんな嘘つかなきゃいけないんですか。
【緑】誰得ですか。
（聞いてない）覚えてないなあ。…まあいいか。で、あんた何。
【赤】その「何」に対してどう答えたらいいんでしょうか。
【緑】何してる人。
【赤】ここで、待ち合わせを。
【緑】そうじゃなくて、仕事。
【赤】初対面の人間に聞きますか、そういうこと。
【緑】なんか、ヤバイ仕事？
【赤】違います。
【緑】じゃあいいじゃん。
【赤】仕事は、あの、一応、絵をかいたりしてます。
【緑】へー！ じゃあさ、ジバニャン描いて。
【赤】へ？
【緑】それで、動かして。ひやくれつ肉球。ニヤニヤニヤニヤニヤニヤーって。
【赤】アニメーターじゃないです。
【緑】じゃあ、動かなくていいからジバニャン描いて。
【赤】漫画家でもないんで。
【緑】じゃあ何？
【赤】音の響きとしては漫画家に近いんですけど、漫画家をちよつと変えて…
【緑】漫☆画太郎。
【赤】珍遊記もまんゆうきも描きません。違います。画家、画家です。一応。
【緑】有名なの？
【赤】あ、いえ、ぜんぜん。
【緑】ふーん。じゃあさ、似顔絵描いて。
【赤】あの、いきなりポーズとられても。
【緑】似顔絵じゃなくて、肖像画っていうんだっけ？
【赤】あの、そういうジャンルじゃないんです、僕。
【緑】じゃあ、風景画とか？
【赤】ちよつと口で説明するのが難しいんですけど…
【緑】エロいやつ？
【赤】違います。
【緑】もしかして、よく分かんないやつ？ 芸術の人？

【赤】 あ、ええ、はい。おおまかにいうと、そんな感じですよ。
【緑】 ふーん。儲かるの。ゲージュツ。
【赤】 あ、いえ、あんまり。というか全然。
【緑】 だいたいさ、絵ってどこで売ってんの。
【赤】 デパートとか画廊とか借りて、展覧会やってそこで売るんです。
【緑】 展示即売会ってやつね。
【赤】 はい。そこそ有名な人とか、お金ある人とかはそんな感じで。僕は、有名でもないし、お金もないので、描いた絵をネットに載せたりとかして。ツイッターとか。

【緑】 ミュージシャンでいうところの路上ゲリラライブみたいな？
【赤】 近いかもしれません。
【赤】 で、時々、興味持ってくれた人が買ってくれたりとか。
【緑】 ふーん。
【赤】 今日も、それでここに。待ち合わせで。
【赤】 へー。良かったね。
【赤】 まだ買ってもらえると決まったわけじゃないので。冷やかしくても多いし。
【緑】 そうなんだ。で、どんな絵なの。
【赤】 ちよつと口で説明するのが難しいんですけど。
【緑】 見せて。
【赤】 いや、人にお見せするほどのものじゃあ…。
【緑】 これから売ろうかっていうのに人に見せないっておかしくない？
【赤】 いや、なんか恥ずかしくて。

【赤】 【赤】、カバンの中の絵をチラ見したりして…
【緑】 いいじゃないの、減るもんじゃなし。

【赤】 ああつ。
【赤】 【緑】、【赤】のカバンを奪って絵を取り出す。
【赤】 なんともコメントしづらい感じの絵が出てくる。

【緑】 あ、あー。(社交辞令) なんていうか、その、いい絵じゃない？
【赤】 あの、それ、上下が逆です。
【緑】 (社交辞令継続中) 上下が逆のままでも、すごくいい絵じゃない？
【赤】 あの、もう返してください。
【緑】 (上下を正しくして) おー、すごい。上下を正しくしたら、更にいい絵じゃない？
【赤】 う。
【緑】 どうしたの？

【赤】 急にお腹が。
【緑】 あらま。
【赤】 あ痛たたたた！

【赤】、先ほどの水があたったのか、ヨロヨロとトイレへ。

【赤】 あのと、すいません、ちよつと失礼します。

入れ替わりにバタバタと【青】が入ってくる、

【青】 おまたせいたしました！ ハイボールみたいなシャンパンみたいなハイボール
【緑】 でございます。

【青】 遅いー。

【青】 いやあ、シャンパンみたいなハイボールみたいなシャンパンなのか、ハイボ
【緑】 ルみたいなシャンパンみたいなハイボールなのか、作ってる間にどっちかわから
なくなりまして。しばし途方に暮れておりました。

（もう飲んだ）おかわりー。

【青】 瞬殺ですか。かしこまりました。

【青】、またしてもバックヤードに戻る。
と、そこに【黒】がやってくる。

【黒】、【青】のところにやってきて…

【黒】 失礼、大変お待たせしました。
【緑】 誰？

【赤】の絵を見て）これですね。いやあ、素晴らしい。現物は更に見事だ。

【緑】 そうかな？

御謙遜を。

【緑】 なんかよくわかんないよね。

【黒】 そこがいいんじゃないやありませんか。

【緑】 そうなんだ。

【黒】 早速で失礼ですが、こちら、お譲りいただけますか？

【緑】 ー、いいんじゃない？

【黒】 ありがとうございます。それでは代金は（指3本）これくらいで。

【緑】 ー、いいんじゃない？

【黒】 では、こちら、三十万円です。

【緑】 三十万！？

【黒】 失礼、お気に障りましたか。

【緑】 三十万つてちよつと！

【黒】 そうですよ、それでは（指5本）これでいかがでしょうか。五十万円です。

【黒】 ごと、五十万！
【黒】 ええ、いかがでしょうか。
【緑】 この絵を。
【黒】 ええ、
【緑】 五十万？
【黒】 はい。
【緑】 正気？
【黒】 それではもう一声。(指7本) これでいかがでしょうか。
【緑】 馬鹿なの？
【黒】 そうおっしゃられても、私もさすがにこれ以上は。
【緑】 馬鹿でしょ？
【黒】 そうですか、やはりこの額ではご不満ですか。
【緑】 いやいやいや。
【黒】 イヤを三度も繰り返すほど嫌だ、と。
【緑】 (あまりのことに口をパクパク)
【黒】 そうですか。そうでしょうね。いやいや、これくらいでは諦めませんよ。また、
出直して参ります。

【黒】、勝手に納得して去る。

【緑】 あ、え、ちよっと。待って。七十万？ この絵が？

【赤】、ヨロヨロとトイレから戻ってくる。

【赤】 失礼しました。なんか急にお腹がきゅーつときて。なんか悪いものでも食べた
かな？
【緑】 七十万だって。
【赤】 はい？
【緑】 この絵、七十万だって。
【赤】 なんのことで？
【緑】 この絵、買いに来た人が、七十万払うって。
【赤】 またまた。
【緑】 いや、ほんと。
【赤】 からかわないでくださいよ。僕の絵なんて、せいぜい七千円ですよ。
【緑】 いや、私もそう思うけどさ。
【赤】 どこにいるんですか、その人。
【緑】 帰った。
【赤】 からかってるんでしょ？
【緑】 からかってない。
【赤】 じゃあ酔っぱらってるんでしょ。

【緑】 酔い醒めるわ。これが七十万円って、冗談でしょ。

【緑】、【赤】の絵をテーブルの上に置く。

と、テーブルの下から何者かの手が伸びてきて、その絵を掴む。
音楽。

オークシヨニアの恰好をした【桃】が現れる。

【桃】 七十万円！

場はレストランから一転して、熱気渦巻くオークシヨン会場に変わる。

【白】【黒】【青】【緑】、落札者として参加。

【桃】 ロットナンバー1973、ルイス・エマノン作「崩壊し再構成する宇宙の深淵」。

号数の小さな小品ではありますが、シンプルな構成の中に、無限の広がりとその抒情性とゆらぎを感じさせる名品です。それでは、七十万円から。

【緑】 七十一万。

【桃】 緑のご婦人、七十一万円です。

【青】 七十二万。

【桃】 青のご婦人、七十二万円です。

【緑】 七十三万。

【青】 七十四万。

【緑】 七十五万。

【青】 七十六万。

静かな沈黙。

【桃】 青のご婦人が七十六万です。（【緑】に）よろしいですか。

【緑】 （勝負をかけて）八十万！

【青】、悩む。

【桃】 緑のご婦人が、八十万円です。（【青】に）よろしいですか。ゴーイングワンス・

トワイズ：

【青】 八十一万！

【緑】 （畳み掛けるように）九十万！

【青】、諦めて椅子に座りこむ。

【桃】 緑のご婦人が、九十万円です。よろしいで…

【黒】 【桃】の言葉を遮るように）百万。

視線が新たな参加者の【黒】に集中する。

【桃】 失礼、聞き落しました。もう一度よろしいですか？
【黒】 百万だ。

【緑】、諦めて椅子に座りこむ。

【桃】 百万円、黒の紳士から。百万円です。

【白】 百五十。

【黒】 二百。

【白】 三百

【黒】 五百

【白】 一千万。

【赤】 一千万!?

【桃】 (【赤】に) ビッドなさらぬ方は、お静かに願います。

【赤】 一千万!？ 僕の絵が？

【桃】 一千万です。白の紳士、一千万。

【黒】 ……二千万。

【赤】 (なんだか怖くなってきた) あの、やめます。やっぱり売るのはやめます！

【白】 三千万！

【黒】 四千万!!!

【白】 五千万!!!!

【黒】 六千万!!!!!!

【赤】 返してください、僕の絵！

【赤】、【桃】から絵をひったくるように取り戻す。

音楽。

その一枚の絵を求めて、争いが始まる。

(シーン1終了)

再びレストランっぽい環境音楽。

3台ほどのテーブル。

そのうちの一つは空席。

もう一台のテーブルにはメニューを眺める一人の老人（【白】）。

その側にはギャルソン風の男（【桃】）。

真ん中のテーブルには絵を抱え込んだ【黒】が突っ伏している。

【黒】、目を覚まし…

【黒】返してください、僕の絵！

静かな間。

【桃】、【黒】のテーブルにやってきて…

【桃】お目覚めですか？

【黒】あ、あれ、すみません。…僕、寝てました？

【桃】お連れ様、お見えになりませんか。

【黒】あ、ああ、ええ、そうですね。

【桃】よろしければ、お水でもお持ちしましょうか？

【黒】あ、はい、…できればヌルヌルしてないやつを。

【桃】ヌルヌル？

【黒】はい、ヌルヌルしてないやつ。

【桃】申し訳ございません。当店にはかなりヌルヌルしたものと、ややヌルヌルしたものしかご準備がございませんで。

【黒】え？ じゃあ、ややヌルヌルした方で。

【桃】かしこまりま…。

【黒】、まじまじと【桃】の顔や姿を見て…

【桃】あの、何か？

【黒】いえ、なんでも。

【桃】なんでもないような視線には思えないのですが。（顔を触って）もしかして何かついてます？（鼻毛やチャック周辺を気にして）もしくは何かエチケツ的にアウトなものが飛び出てます？

【黒】いえ、そうじゃなくて、何かさつきと雰囲気違うような…

【桃】気のせいでは？

【黒】（周りを見回して）さっきの女の人？

【桃】女の人？

【黒】はい、なんかすごく酔っぱらった感じの。

【桃】 酔っぱらった？
【黒】 シャンパンみたいなハイボールみたいなシャンパン。
【桃】 シャンパンみたいなハイボールみたいなシャンパン？ 何でしょうか、それは？
【黒】 いましたよね、女の人。
【桃】 先ほどから、お客様と、あちらのお客様のお二人だけですが。
【黒】 え？
【桃】 お水、お持ちしますね。

【桃】、バックヤードに下がろうとしたところを【白】に呼び止められる

【白】 よろしいかな。
【桃】 お待たせいたしました。
【白】 (ワインリストを渡して) 赤で、お勧めのものを。
【桃】 かしこまりました。おいくらぐらいのものにいたしましょうか？
【白】 いくらでも結構…といっても、ロマネコンティをお願いするほどの持ち合わせはありませんがな。
【桃】 かしこまりました。それでは(リストを指して)こちらなどがでしょうか？
【白】 結構。…ああ、グラスは3つでお願いします。
【桃】 3つ…でございますね。かしこまりました。

【桃】、バックヤードに下がる。

【白】、【黒】の方を向いて…

【白】 そちらのお若い方。
【黒】 僕、ですか？
【白】 よかったら、一緒にいかがですか。この年では一人でワイン一本を開けるのはさすがに大変だ。
【黒】 あ、いえ。大丈夫です。
【白】 そう遠慮なさらずに。

【白】、【黒】の席の方へ移動して…

【黒】 あの、お気遣いありがとうございます、本当に結構です。
【白】 そうですか。ああ、もしかしてお酒はあまりお好きでない？
【黒】 あ、いえ、これから、仕事なので。
【白】 お仕事。
【黒】 仕事というか、商談というか。ここで。
【白】 その絵、ですか。
【黒】 あ、はい。
【白】 拝見しても？

【白】、伏せてある【黒】の絵に手を伸ばす。

【黒】 駄目です！

【白】 おやおや、これは失礼。

【桃】、水とワインを準備してやってくる。

【桃】 お待たせいたしました。ややヌルヌルした水でございます。
【黒】 ……どうも。

【桃】、【白】のテーブルへ。

【桃】 お待たせいたしました。シャトームートンロートシルト73年でございます。
【白】 73年…ピカソの年だね。
【桃】 左様でございます
【白】 70年のシャガール、75年のウォーホル、不思議とラベルを描く画家が有名な年ほど…(間)

【桃】 あまりワインの出来が良く…
【白】 (遮って)…こういう話はやめておきましょう。ワインはワイン。同じ名のワインであっても一年一年その評価は違い、同じ年であっても一瓶一瓶が違う。うむ。それにしましょう。
【桃】 かしこまりました。

【桃】、ワインを抜栓してテイasting用にサーブ。

【白】 (一口飲んで)うむ
【桃】 いかがでしょうか？
【白】 (ソムリエにも勧めて)
【桃】 頂戴します。
【白】 結構。ただ、まだ少し固いようだね。
【桃】 デキャンタージュを？
【白】 いや、結構。デキャンタージュはあまり好きではなくてね。何か、無理やり
時を進めるような気がしてね。グラスに注いで、のんびりと待つことにしまし
う。なに、そう急がなくても時間はある。
【桃】 左様でございますね。では、その間に何か開けましょうか？
【白】 では、若い若いボジョレーを。
【桃】 かしこまりました。

【桃】、新しいワインを準備しに下がる。

【白】 …お若い方。
【黒】 なんてしょうか。
【白】 せて色や香りだけでも楽しんでみてはいかがかな。
【黒】 色や香り、ですか。
【白】 味はワインにとって、一つの要素でしかない。色・香り・歴史・様々な要素が絡み合っって一つのワインになるんです。
【黒】 そうなんです。僕、全然詳しくないんで。お肉は赤、魚は白。軽めの赤がブルゴーニュ、重めがボルドーとか。それくらいで。
【白】 それだけご存じなら十分。

【桃】 がボジョレーを手に戻ってくる。

【桃】 お待たせいたしました。ボジョレーヌーボーでございます。
【白】 ドメーヌは？
【桃】 デュ・トラコを。
【白】 それは良い。
【桃】 はい。新酒らしいフレッシュさの中にも、濃厚な果実の香りをたたえた、ある意味ではヌーヴォーらしからぬ深みのあるワインです。
【白】 それでは、さっそくサーブを。
【桃】 かしこまりました。

【桃】、手際よくワインを抜栓し、グラスに注ぐ。

【桃】 どうぞ。
【白】 一口に赤ワインといっても、色々な赤がある。このワインのようにブルゴーニュの新酒ならば、ルビーのような透感のある赤。ムートン。ボルドーの古酒ならば、黒とも表現できるような、深く暗い赤。

【白】、二つのグラスを手に比べてみせる。

【黒】 本当だ。
【白】 古いワインには三つある、という言葉聞いたことはありませんか。
【桃】 いえ？
【黒】 いいえ。
【白】 古いワインには三つある。一つは長い時を経て熟成した素晴らしいワイン。一つは、ただ古くなっただけのワイン。…さしずめ私のようなものだ。
【桃】 御謙遜を。
【白】 そして最後の一つは
【桃】 はい。

【白】そして最後の一つが：思い出せない。
【桃】一つは、熟成した素晴らしいワイン。一つは、ただ古くなっただけのワイン。
【白】どこで見たのか聞いたのか。最後の一つがどうしても思い出せない。思い出せないというよりも、日々忘れていくような気さえしているんです。

と、そこに【緑】がやってくる。
もちろんしたたかに酔っぱらって。

【緑】、その辺の空いているテーブルに勝手に着席。

【桃】いらっしやいませ。

【緑】いらっしやいました。

【桃】お連れ様ですか？

【黒】違います。

【緑】に）お待ち合わせでいらっしやいますか？

【緑】頷く。

【緑】とりあえず赤ね。

【桃】かしこまりました。アサヒと麒麟がございしますが。

【緑】赤。生じゃなーい。

【桃】あ、ああ、赤ですね。

【緑】男は黙ってサップロビール。

【桃】あ、やっぱり生ですか。

【緑】赤つつてんでしょ！

【桃】お客様、赤にも色々ございまして。

【緑】、【白】の赤ワインを発見。

【緑】美味しそうね、それ。

【桃】お客様、あれはちよつと。

【緑】ちよつと何。

【桃】ちよつとというか、かなりお高いものでございまして。

【黒】え、いくらくらいするんです。

【桃】【黒】に耳打ち）一杯5万円。

【黒】5万円！？ 一杯で！？

【緑】なにゴチャゴチャやってんの。

【白】よろしければ、いかがですか？

【桃】ええっ！

【黒】えええっ！

【緑】よろしいよろしい、全然よろしい。

【緑】、フラフラと【白】の方へ近づいて行って勝手に着席。
二つのグラスをじっと見つめて、ムートンのグラスを手に取る。

【緑】 こっちかな。
【桃】 (ひそひそ) ムートンだ！
【緑】 やっぱりこっちかな。
【桃】 (ひそひそ) ボジョレーだ。
【黒】 (ひそひそ) それって。
【桃】 (ひそひそ) 安い方。一杯千円。
【黒】 (ひそひそ) 僕にとってはそれでも十分高いです。

【緑】、悩んだ末にボジョレーのグラスを取る。

【桃】 ボジョレーだ。
【緑】 いただきます。
【桃】 意外と礼儀正しい。
【白】 どうぞ。
【緑】 (一口飲んで) 美味しい！ 軽くて飲みやすい！

【緑】、空いた手にムートンのグラスを持って…

【緑】 で、こっちはどうかかな。
【桃】 # ああっ！
【黒】 # ああっ！
【緑】 (一口飲んで) うわっ、なにこれ、濃厚！ ムチャクチャ美味しい！
【桃】 そりゃそうでしょうよ。
【黒】 5万円、一杯5万円。
【緑】 (飲み干して) ごちそうさまでした。美味しかった。グーよ、グー！
【白】 そうですか、それはよかったです。

【緑】、もう一度ボジョレーに戻って

【緑】 うわっ、美味しくない！ なんかも薄っぺらい。サイテー。
【黒】 さっきまで褒めてたのに。
【桃】 そりゃムートンと比べれば大概のワインは薄っぺらいでしょうよ。
【緑】 でも飲むけど。がはははは。

【緑】、なんだかんだ言いながらボジョレーも飲み干す。

【緑】 くっはー、マズい。でも、ごちそうさまでした。
【桃】 礼儀だけは正しい。
【白】 どういたしまして。
【緑】 よし。行くぞ。

【緑】、フラフラと立ち上がって自分の席に戻る。

【緑】 Z z z z z :

【黒】 寝た？

【白】 よろしければ、お二人もいかがですか？

【桃】 喜んで。

【黒】 あ、じゃあ、香りだけで。

【白】 しかし、ただ飲んだのでは面白くない。ここはひとつ、年寄りの酔狂におつきあいでいただけませんか？

【桃】 酔狂、といいますと？

【白】 ブラインドテイステイングはいかがかな？

【黒】 あ、それ知ってます。漫画で読みました。ボトルのラベルを隠して、何のボトルを飲んでるのか当てるってやつですよ。お、お、これは何年のなんとかだ！
みたいな。

【白】 左様左様。

【黒】 でも、もう何のワインだか、わかっちゃってますよね。

【桃】 まさか、フルブラインドですか？

【黒】 フル：それは知らないです。漫画には出てこなかった。

【桃】 ボトルのラベルを隠すだけじゃなく、目隠しをして、本当に味覚と嗅覚だけでワインを当てるんです。

【黒】 あ、なんかテレビでやってるやつ？

【白】 そうそう、私もたまにたま見ましてな。ドン・ペリニヨンとスペインのカヴァ、味も香りもまったく違うシャンパンを飲んで、どちらがドンペリカを当てるのだけのことを、皆面白いように間違える。

【黒】 でもああいう番組って、やらせていうか、台本あるんですよ。普通、間違えないくらい違うんですよ。

【白】 (桃に) あなたは、ボルドーとブルゴーニュを間違えたことは？

【桃】 まだありませんね。：今日のところは。

【白】 (笑う) そうでしょう。そういうジョークがあるくらいブラインドテイステイングは難しい。

【桃】 はい。

【白】 お願いできますかな？

【桃】 かしこまりました。少々お待ちくださいませ。

【桃】、ポケットから何やら取り出してグラスに貼っていく。

【桃】 目印のシールを貼ったグラスと、何も貼っていないグラスをご準備しました。

【桃】、6つのグラスに、それぞれ3杯ずつムートンとボジョレーを注ぐ。

【桃】 目印のある方がムートン、ない方がボジョレーです。シールの貼ってあるワイングラスの脚は触らないようにお願いします。それでは、テーブルに背を向けて、自分のグラスは見ずに、他の人のグラスの左右を入れ替えてください。入れ替えたなら目を閉じて、またテーブルに背を向けてお待ちください。(白に)では、お客様から時計回りで。

【白】 ほうほう。

【黒】 こんな感じですか。

【桃】 では、こうして、こうで。皆さん、…目はつぶってますね。

【緑】、目を覚ます。

【緑】、天才的な嗅覚でムートンをかぎ分け片っ端から飲み干す。

【緑】、空いたグラスにボジョレーを入れて自席に戻る。

【緑】 Z Z z z z z。

【白】 はいはい。

【黒】 つぶってます。

【桃】 薄目とかもダメですからね。

【白】 しっかりとつぶつとるよ。まあ、開けても大してよく見えるわけでもないが。

【黒】 わかってますよ、小学生の学級会じゃないんですから。

【桃】 では、始めましょう。倒さないように注意してご自分のグラスを両手に持ってください。

全てのグラスにボジョレーしか入っていない。

【白】 グラス、グラス。あつたあつた。

【黒】 持ちました。

【桃】 私もです。準備オッケーですね。では、始めましょう。

【黒】 これは、なかなかドキドキしますな。

【桃】 プロとして、さすがにこれは外せませんね。

三人、目を閉じたまま、小難しい顔でテイastingを始める。

【白】 ふむ。これはボジョレーっぽい。

【黒】 (匂いを嗅いで) ワインの匂い。(もう一方のグラスの匂いを嗅いで) こっちもワインの匂い。え、なんか違うの？ 全然わからない。

【桃】 (一口飲んで) ボジョレーに使われるブドウの品種はブルゴーニュ地方に多く見られるガメイ。その特徴は黒糖やジャムのようなフルーティな香りと、渋みの元になるタンニンの少ない飲み口の良さ。間違いない。これはボジョレー。

【白】 こちらがボジョレー。すると、こちらがムートン。(もう一方を飲んで) いや、しかしこのフルーティな香りはボジョレーらしくもある。

【黒】 (何度も匂いを嗅いで) ダメだ、やっぱり同じ匂いにしか思えない。

【桃】 そして、こちらがシャトームートンロートシルト。73年。確かに例年に比べれば、あまりよい出来の年ではないでしょう。しかし、腐ってもムートン。たとえるなら、進学校の落ちこぼれのような、そんなワインです。出来は良くないかもしれないが、決して赤点ではない。そういった意味では、パーカーポイント65点という評価も頷ける。

【黒】 ちよつとだけ、飲んじやおうかな。

【白】 意外に難しいものですな。

【桃】 慣れてらっしゃらない方にはそうなのかもしれませんね。まあ、私はこれが仕事です。

【白】 さすがですな。

【黒】 ボジョレーって、ブルゴーニュなんですよね。

【桃】 その通りです。

【黒】 軽めの赤がブルゴーニュ、重めがボルドー。だから、ボジョレーは軽め。

【白】 左様左様。

【黒】、なめるように軽く飲んで…

【黒】 飲みやすい！ 軽い感じだから、こっちがボジョレー？

【黒】、もう一杯も飲んでみる。

【黒】 あれ？ こっちも軽くて飲みやすい。やっぱりこっちがボジョレー？

【黒】、グラスに交互に口をつける。

【黒】 あれ？ あれ？ あれあれあれ？

【黒】、大混乱。

【桃】 それでは、ボジョレーだと思いうグラスをテーブルの上に。ムートンだと思いうグラスを高く掲げてください。

【白】 二択ですからな、確率は五分五分だ。

【桃】 目を開いたとき、手に持っているグラスに目印のシールが貼ってあれば、正解です。

【黒】 え、どっち、わかんないよ。

【黒】、混乱して両方のグラスをテーブルの上に置く。

【桃】 よろしいですか、3，2，1，どうぞ！

【黒】 以外の時間が止まる。

そこに【赤】が入ってくる。

【赤】 【黒】に待たせたね。

【黒】 あ、いえ。

【赤】 さっそくだけで、絵。

【黒】 (絵を袋に入れたまま渡す) あ、はい、これです。

【赤】、絵を受け取るが中身も見ず…

【赤】 代金はこれで。

【赤】、封筒にいれた代金を投げてよこす。

【赤】 じゃあ、急ぐんで、これで。ああ、ここの会計はすませておくから。何か好きなものの頼むといい。

【黒】、中身をあらためる。

【黒】 あの。

【赤】 なに。

【黒】 あの、これ、ちょっと。

【赤】 何？ 不満？

【黒】 いえ、あの、不満って言うか…でも、いくらなんでも三千円って…これじゃ画材代にもならない。

【赤】、舌打ちして財布からあと二千円ほどを取り出して渡す。

【赤】 じゃあ、これで。

【黒】 (不満げな表情) …。

【赤】 なんだ、いったいいくら欲しいんだ。

【黒】 六千円、いや、せめて、七千円くらい。

【赤】 五千円でも出し過ぎなくらいだと思ってるんだけど？
【黒】 あの、せめて見てもらえませんか、絵。
【赤】 見る？
【黒】 七十万円で買うって人もいます。僕の絵。
【赤】 どこに。
【黒】 今、ここには、居ませんけど。
【赤】 嘘つけ。
【黒】 嘘じゃないです。
【赤】 じゃあ、そいつに売れ。
【黒】 …。
【赤】 いるわけないだろ、そんな奴。いたらただの馬鹿か酔っ払いだ。
【黒】 とにかく、見てください、僕の絵。

【赤】、気のない感じで渋々絵を取り出す。

【赤】 二千円返せ。やっぱり三千円で十分だ。

【黒】 そんな！

なんだ、この絵。ただでさえ号数が小さな絵なのに、構成はバラバラ。窮屈で何も訴えかけてくるものがない。それに加えて、どこかでみたようなオリジナリティのなさ。幼稚園児の落書きのほうがまだマシだ。

【黒】 なんだと！

【赤】 なんだ、その口の利き方は。

【黒】 あ、いえ、すみません。でも、いくらなんでも幼稚園児ってあんまりじゃ。

【赤】 俺の他に、いったい誰がお前なんかの絵に金を出す。

【黒】 そんな…。

【赤】、カバンから飲みかけのコーラのペットボトルを取り出して

【赤】 いくらだ。

【黒】 え？

【赤】 このコーラ、いくらなら買う。

【黒】 どういう意味ですか。

どこにでもある、しかも飲みかけでぬるくなった、炭酸の抜けかけたコーラを、お前はいくらなら買う？

【黒】 買いません。

【赤】 そうだろ。それがまともな人間の考え方だ。そんなもの、誰も欲しがらない。自販機でもコンビニでも、160円出せば冷えた新しいコーラが手に入る。

【黒】 何が言いたいんですか。

【赤】、ペットボトルを手にして…

【赤】 もしここが山の七合目なら、3000円で売れるかもしれない。もしここが砂漠のど真ん中で、死にそうなほどに喉が渴いている相手なら、ぬるかろうが飲みかけだろうが、高い値段で売れるだろう。物には値段はない。値段をつけるのは、それを欲しがる人間の中にある。：お前の絵は、砂漠の冷たいコーラか。それとも街中の飲みかけのコーラか。
：。

【黒】 誰も欲しがらないものには、値段はつかない。
【赤】 でも、もしかしたら。

【黒】 もしかしたら？

【黒】 もしかしたら、どこかにいるかもしれないじゃないですか。僕の絵をわかってくれる人、ちゃんと評価してくれて、ちゃんとした値段で買ってくれる人がどこかに！

【赤】 じゃあ売ってみる！ この絵を七十万円で。

【赤】、【黒】の絵をテーブルに叩きつける。

と、テーブルの下から何者かの手が伸びてきて、その絵を掴む。

音楽。

オークションニアの恰好をした【青】が現れる。

【青】 七十万円！

場はレストランから一転してオークション会場に変わる。

【白】【赤】【桃】【緑】、落札者として参加。

【桃】 ロットナンバー1973、ルイス・エマノン作「崩壊し再構成する宇宙の深淵」。これと違って特徴のない、一見、幼稚園児の落書きにも似たバランスの悪い構成。中途半端な大きな号数は、まさに帯に短したすきに長し。家にあっても使いどころに困る、まるで披露宴の引き出物で貰った夫婦茶碗のような作品です。それは、七十万円から。

静寂。

【桃】 七十万円。ありませんか？

【青】 緑のご婦人。

【緑】 (首を横に振る)

【青】 ピンクの紳士。

【桃】 (眼を逸らす)

【青】 そちらの赤の紳士、白の紳士、お二人もよろしいですか？

【赤】 「いらない」と手を振る)

【白】 「いらない」と手を立てる)

【青】 どなたもいらつしやらないようですので、この作品はダッチオークションとさせていただきます。それでは六十万円：五十万、四十万、三十万円。ありませんか？

参加者から一向に反応がない。

【青】 二十万。十万円。五万円。

参加者、微動だにしない。

【青】 五万円です。いかがでしょうか？ 緑のご婦人。

【緑】 (あくびをする)

【青】 桃色の紳士。

【桃】 (寝てる)

【青】 そちらの赤の紳士、白の紳士、お二人もよろしいですか？

【赤】 (「いらぬ」と指を×に)

【白】 (興味なさそうに手を振る)

【青】 四万、三万、二万、一万、一万円です。ありませんか、一万円。

【黒】 あの、どなたか、いかがでしょうか。僕の絵。一生懸命、時間もかけて、命を削るような気持ちで描きました。一万円です。たった一万円です。いかがでしょうか。

【青】 以上、出品者ご本人からの熱いコメントありがとうございました。一万円。ありませんか、一万円。かなり厚手のキャンバスですので、絵として飾る以外にも鍋敷きとしても使えます。いかがでしょうか。九千円。(お任せ)バラバラにして暖炉の薪に。八千円。

【緑】 が手を上げる。

【青】 緑のご婦人、八千円。

【緑】 あ、違います。伸びです、伸び。

【青】 まぎらわしい動きはお控えください。八千円。…七千円では？

参加者、水を打ったように静か。

【青】 七千円です、さあ、もってけドロボー！ 六千円とばして五千円。今なら同じものをもう一枚おつけして、四千円。各種クレジットカード利用可能で、三千円。最長三十六回の分割払いも可能で二千円。金利・分割手数料はジャパネット負担で千円ポッキリ。

【黒】 どうして。

【青】 どなたか、タダで引き取ってくれる方は？

【黒】

どうしてわかってくれないんだ。

【青】

わかりました。処分料として千円つけます。

【赤】

(手を上げる)

【青】

赤の紳士。他にありませんか？ ゴーイングワンス・トワイス・ソルド！

オークションハンマーが鳴らされ、落札。

【青】

ロットナンバー1973は、赤の紳士にマイナス千円で。

【黒】

…ふざけるな。

【青】

はい？

【黒】

ふざけるな！ 返せ、僕の絵！！

音楽。

【黒】の絵、【赤】の手に渡る。

【黒】、絵を取り返すべく【青】に突進。

【黒】、絵を取り返し、その場の全員を打ち倒す。

暗転。

(シーン2終了)

三たび、レストランのような環境音楽。
ワインを片手に持った【白】【桃】【黒】。
酔って椅子で寝ている【緑】。

【桃】 それでは、ボジョレーだと思いうグラスをテーブルの上に。ムートンだと思いうグラスを高く掲げてください。

【白】 二択ですから、確率は五分五分だ。

【桃】 目を開いたとき、手に持っているグラスに目印のシールが貼ってあれば、正解です。

【桃】、姑息にも薄目を開けてグラスを確認している。

【黒】 え、どっち、わかんないよ。

【黒】、混乱して両方のグラスをテーブルの上に置く。

【桃】 よろしいですか、3, 2, 1, どうぞ！

【白】【桃】【黒】、目を開ける。

三人、グラスを確認して…

【白】 シールがない。ということは…間違えましたな。

【桃】 私は当然正解です。

【黒】 すみません、全然わからなかったので、どっちも置いちゃいました。

【白】 ということは、正解はあなただけ。いやいや、さすがはプロ。おみそれしました。

【桃】 いえいえ、それほどでも。さすがにちょっと緊張しましたが。

【白】 案外わからないもんですなあ。

【桃】 さすが、シャトームートンルートシルト、目を閉じていても、はっきりとわかるその存在感。そして、目を開いてみれば、この黒ともいえるような、深く暗い赤？

【桃】、自分でしゃべりながら違和感を感じる。

【桃】、マジマジとワインを見て…

【白】 何か、色がムートンにしては明るいような。

【桃】 照明の具合でしょうかね？

【白】 ああ、なるほど。

【桃】 (飲んで) おお、そしてこのどっしりとしたタンニン？
【白】 (飲んで) 何か、軽くて飲みやすいですな。このムートン。
【桃】 ですね。まるでボジョレーのような…

【桃】、さすがに変だと気づく。

【桃】 あれ？

【桃】、両方のグラスを忙しく飲んだり色をみたりして比べる

【桃】 これは、どういうことでしょうか。
【白】 どちらも同じような色に見えますな。
【桃】 しかもルビーのような透明感のある赤。
【白】 ボルドーではなく、
【桃】 ブルゴーニュっぽい赤。
【白】 そして、黒糖やジャムのようなフルーティな香り。
【桃】 更に、タンニンの少ない飲み口の良さ。
【白】 なんとというか、限りなくボジョレーの特徴に近いような気がしますな。

【桃】、恐る恐るワインボトルを確認して…

【桃】 あー！
【白】 どうしましたな。
【桃】 同じ量だけ注いだはずなのに、ボジョレーだけなんか減ってる！

【桃】、【白】にワインボトルを見せて…

【白】 ああ、本当だ。これはいったいどういうことでしょうか。
【桃】 確かにグラスに注いだはずのムートンが、いつの間にかボジョレーに変わって
【白】 いた、ということに。
【桃】 あなた、マジックの心得は？
【黒】 ナポレオンの眼鏡の方に似ていると言われたことなら。
【白】 僕たちが目を閉じてる間に、誰かが入れ替えたとか。
【桃】 なるほど。
【桃】 すると疑わしいのは…

【白】 【桃】 【黒】の視線が【緑】に注がれる。

【桃】 あれか。
【黒】 ですかね。

【緑】（視線を感じて目を覚ました）何。

【黒】いえ、なんでもありません。

【緑】なんでもないことはないですよ。何見てんのよ。

【桃】単刀直入に聞きます。飲んだでしょう？

【緑】何を。

【桃】シャトームートンロートシルト73年。

【緑】あの美味しかった方のやつ？ 飲んだ飲んだ。美味しかったね、あれ。

【桃】このグラスのムートンを三杯飲み干して、証拠隠滅のためにボジョレーを注い

だ。そういうことですね。

【緑】はあ？ 何のこと？ 三杯？

【桃】おかげでとんだ赤っ恥だ。

【緑】さっき一杯もらったじゃない。

【桃】そのあと三杯飲んだんでしょ！

【緑】知らない、覚えてない。

【桃】しらばっくれる気ですか。

【緑】記憶にございません。

【桃】政治家か！

【緑】だって本当に覚えてないんだもん。

【桃】真実はひとつ。飲んだか飲まなかったか。

【緑】思い出せない！

【桃】思い出せ！ そして3杯のムートンと俺のプライドを元に戻せ。

【緑】そう言われれば、飲んだような、飲んでないような。うーん、わかりませー

ん。

静かな間。

【白】…本当に怪しいのは彼女だけですか？

【桃】どういうことでしょうか？

【白】我々が目を閉じて、グラスを手に持つまでの、あんな短い時間で、ワインを三杯飲み干して、新しく注ぎ直すなんてことが、このようなかよわい女性にできるものなんでしょうか。

【桃】（小声で）できそう。

【黒】（小声で）できそう。

【緑】できます。

【白】我々が目を閉じている間に、目をさまし、駆け寄って、飲み干して、注ぐ。なかなか難しそうだとは思いませんか？

【黒】今、本人ができると言ったように聞こえたんですけど。

【緑】やっぱむりー。

【桃】難しそうだけれど、不可能ではない。

【白】でも、誰もそれを証明できない。

【緑】

そうだそうだ！

【白】

むしろ、客観的に見ればワインに近い場所に居た我々三人こそが、怪しいのではないでしようかな？ 我々の中の誰か一人が犯人ならば、こっそりと目を開けて飲み干した上に注ぎ直すこともできるでしょう。

【桃】

まあ、それはそうかもしれませんが。

【白】

我々の中で一番怪しいのは…【桃】に。あなただ。

【桃】

え？

【黒】

どうして？

【桃】

そうですよ、どうして私なんですか！？

【白】

説明しましょう。それでは、テイスティングの準備をしていた時のことを思い出してみてください。

問題のシーンが再現される。

【桃】

(白に) では、お客様から時計回りで。

【白】

ほうほう。

【黒】

こんな感じですか。

【桃】

では、こうして、(二杯目を飲む) こうで。皆さん、…目はつぶってますね。

【緑】

Z Z Z Z Z Z。

【白】

はいはい。

【黒】

つぶってます。

【桃】

薄目とかもダメですからね。(二杯目を飲む)

【白】

しっかりとつぶつとるよ。まあ、開けても大してよく見えるわけでもないが。

【黒】

わかってますよ、小学生の学級会じゃないんですから。(三杯目を飲む)

【桃】

では、始めましょう。倒さないように注意してご自分のグラスを両手に持ってください。

元の時間の流れに戻る。

【白】

あなたが一番時間の余裕があるんです。私と彼に先に目をつぶらせてしまえば、三杯のワインを飲み干し、新たに注ぐまでの間をつなぐために喋っていればいいわけですからね。

【桃】

それはそうかもしれませんが。

【白】

その後、テイスティングをわざと間違えて、自分が犯人ではないと思わせれば一丁上がりです

【緑】

【桃】に。お前が犯人か！

【桃】

違います。飲んでません。

【緑】

真実はひとつ、飲んだか飲まなかったか。

【白】

でも、誰もそれを証明できない。

【黒】

確かに。

【白】 とはいえ、可能性はそれだけではありません。短い時間とはいえ、あなた【桃】にできるのならば【黒】にあなたにも、私にもできるはずだ。つまり私たちの誰もが怪しい。いや、もしかしたら、まったく関係のない第三者が突然現れて、ワインを飲み干していったのかもしれない。

まったく関係のない第三者、ダンサブルに登場。
ワインを飲み干し、注いで、去る。

【緑】 あ、じゃあ、もしかしたら、犯人はひとりじゃないとか！

まったく関係のない第三者が二名、ペアダンス風に登場。
見事なコンビネーションで素早くワインを飲み干し、注いで、去る。

【白】 なるほど、それは思いつかなかった。
【桃】 失礼ですが、ちょっと想像力が豊かすぎはしませんか？
【白】 誰もが自分は潔白だと主張する。しかし、誰もそれを自分では証明できない。そうだな、たとえばこのラベルに描かれたピカソの絵画「バツカスの宴」。これは本物でしょうか。

【桃】 本物でしょう。
【黒】 ラベルは印刷ですから、正確には複製品：レプリカですよ。
【緑】 じゃあ偽物じゃない。そういうのフェイクっていうんだっけ？
【黒】 レプリカは、フェイクとは違います。
【緑】 何？ どう違うの？

レプリカもフェイクも見た目はどちらも本物と同じです。本物：美術品では本物のことを「真作」って言うんですけど、レプリカは真作じゃなく複製品だとわかるようにしてあるんです。例えば、絵の裏に複製品と書いてあったりとかして。フェイクは贋作といって、偽物だとはわからないようにしてあるものです。簡単に言えば、人に「本物だ」と思わせ、騙すために作られているんです。だから、こちらは絵の裏に偽物の鑑定書が貼り付けてあったり、歴代の所有者のサインが書かれていたりですね。

【緑】 結局どっちなの。本物？ 偽物？
【黒】 ええと、だから、これは本物のレプリカです。
【桃】 なるほど。

【白】 本当にそうでしょうか？
【黒】 どういう意味です？
【白】 確かにこれは印刷された絵、つまりレプリカです。
【黒】 だから、本物のレプリカですよ。

【白】 バツカスの宴は、1959年、ピカソが78才の時の作品だと言われています。しかし、その原画を見たことがあるのは、ピカソにラベルのデザインを発注し、受け取った、ロートシルト男爵だけだ。

【桃】

どういうことでしょうか？

【白】

彼：ロートシルト男爵が「この絵はピカソの絵だ」と言えば、誰もそれを否定できない。もしもそれがピカソが描いたものでなかったとしても。

【黒】

もしそうだとすると、これは本物のレプリカじゃなくて：贋作のレプリカ。

【白】

そういうことです。

【緑】

え、でも、描いた本人はわかるでしょ？

【白】

ピカソは1973年のムートンが世に出る前に、この世を去っています。つまり、ピカソはこのワインのラベルを自分の目で見てはいない。

【桃】

確かに。73年のムートンはその年の秋に収穫されたブドウで造られ、それが世に出るのは、早くても翌年、74年の春ですから。

【緑】

じゃあ、家族とかは？ 見るチャンスありそうじゃない？

【白】

ピカソは自らのアトリエに誰も立ち入らせなかった。たとえ、家族でさえも。

【黒】

それは何かわかる気がします。

【白】

唯一の例外が鳩。

【緑】

鳩？

【白】

ええ。自分の飼っている鳩。

【黒】

けっこう有名な話ですよ。

【白】

ピカソは鳩好きなあまり、自分の娘に鳩を意味する「パロマ」というキラキラネームをつけています。：幸いグレたりせずに、ジュエリーデザイナーとして活躍しているようですが。それはさておき、鳩以外は家族ですらピカソが描く姿をみたものはいない。彼が生涯で描いた十五万点以上の作品のほぼ全てをです。

【桃】

十五万点！？

【白】

十五万点「以上」です。もちろん、中には落書きに近いような挿絵やスケッチ、クロッキーや版画など短い時間で描けそうなものもありますが、それでも生まれたその日から、死ぬその瞬間まで、毎日4つ以上の作品を作り続けなければ、十五万という数にはならない。

【黒】

ギネスブックに載ってるくらいですからね。世界一多作な画家として。

【白】

多作だけでなく、世界一幸運な画家と付け加えるべきでしょう。生きている間に作品が評価され、高値で取引される画家はそう多くはない。ゴッホのように、生前売れた絵はたったの一枚だけ。変態・キチガイ・ヤク中・酔っ払いと罵られ、若くして自ら命を絶った：なんて話は珍しくもなんともない。まあだいたい創造と狂気は紙一重なものです。鳩を飼う以外にも、ピカソには少々おかしい趣味があった。

【桃】

それは？

【白】

なんだと思います？

【緑】

エロいやつ？

【桃】

さあ？

【白】

美術品のコレクションです。

【緑】

エロいやつ？

【白】

そういうものもあったでしょうね。

【桃】 美術品のコレクション：それが何か？ 特におかしいとは思いませんが。
【緑】 おかしいくらいエロいやつ？

【白】 【黒】に) あなたはおそらくご存知でしょう。

【黒】 はい。ピカソの趣味は：贋作のコレクションです。

【白】 左様。

【黒】 しかも自分で、自分の作品の贋作を集めていたんです。

【緑】 なんで？

【黒】 わかりません。

【白】 ピカソの贋作者は何人もいましたが、その中にエルミア・デ・ホーリーという、

【桃】 平凡で短い名前の男がいました。

【白】 ピカソのフルネームはとても長かったそうですね。

【白】 よくご存じで。

【桃】 いえ、たまたまテレビのクイズ番組で。

【白】 エルミア・デ・ホーリー、短いながらも、いくつもの名前を持つ男。そのどれもが本物で、そのどれもが偽物だった。彼は時にピカソであり、マティスであり、

【桃】 ルノワールであった。表現はおかしいかもしれないが、超一流の贋作者でした。

【緑】 そんなにすごいなら自分の絵を描けばいいのにね。

【黒】 売れなかつたんです。技術はあっても、なぜか。

【緑】 音楽で言うところのスタジオミュージシャンみたいな感じ？

【黒】 そうかもしれません。

【白】 ピカソの影響を受けて似たような絵を描く画家、ホーリーほどの腕ではないに

しろ、贋作で一儲けを企むチンピラ紛いの画家や画商、もしかしたら中には本物

も混じっていたかもしれません。いずれにしても、世の中にピカソ風の作品は溢

れかえった。そして、ピカソはそれを集めていた。

【白】

音楽。

オークション会場。

【白】、姿を消している。

【青】と【赤】も姿を現す。

【青】、オークシヨニア「バツカスの宴」と同じ絵を取り出す。

【青】

ロットナンバー1959、作者・作品名ともに不詳。水彩画に、一部にアラビ
アゴムを使った技法の、所謂ピカソ風の作品です。それでは七十万円から。

静寂。

【桃】

七十万円。ありませんか？

【青】

緑のご婦人。

【緑】

(首を横に振る)

【青】

ピンクの紳士。

【桃】 (眼を逸らす)

【青】 そちらの赤の紳士、黒の紳士、お二人もよろしいですか？

【赤】 「「いない」と手を振る)

【黒】 「「いない」と手を立てる)

【青】 どなたもいらっしやらないようですので、この作品はダッチオークションとさせていただきます。それでは六十万円：五十万、四十万、三十万円。ありませんか？

参加者から一向に反応がない。

【青】 二十万。十万円。五万円。

参加者、微動だにしない。

【青】 五万円です。いかがでしょうか？ 緑のご婦人。

【緑】 (あくびをする)

【青】 ピンクの紳士。

【桃】 (寝てる)

【青】 そちらの赤の紳士、黒の紳士、お二人もよろしいですか？

【赤】 「「いない」と指を×に)

【黒】 (興味なさそうに手を振る)

【青】 四万、三万、二万、一万、一万円です。ありませんか、一万円。

と、そこに【白】が遅れて現れる。

【白】 よろしいかな？

【青】 白の紳士、一万円。他にありませんか？ ゴーイングワンス・トワイス・ソルド！

オークションハンマーが鳴らされ、落札。

【青】 ロットナンバー1959は、白の紳士に一万円で。

【白】 (絵に) おかえりなさい。会いたかったよ。

【緑】 おかえりなさい？

【桃】 誰だ。

【赤】 あの顔：確かどこかで。

【黒】 いや、しかし。

【緑】 まさか。

【桃】 そんなわけ。

【赤】 だが、あの顔は。

【黒】 他人のそら似だろ。
【緑】 でもそれにしても。
【桃】 よく似ている。
【赤】 あの顔は。
【黒】 まるで、ピカソ。
【緑】 そんなことが？
【桃】 似すぎている。
【赤】 いや、間違いない。
【黒】 本物のピカソ。
【緑】 じゃあ、あの絵は。
【桃】 ピカソ風じゃなく。
【赤】 本物？
【黒】 本物だと？
【緑】 あの噂。
【桃】 若いころの作品を。
【赤】 無名の時代に二束三文で売りとばした作品を
【黒】 オークションで買い戻していると。

オークション会場が一気にざわつく。

【青】、【赤】もしくは【黒】が描いたあの絵を取り出す。

【青】 お静かに願います。続きましてロットナンバー1960、同じく作者・作品名
ともに不詳。現品・現物以外の情報はございません。それでは七千円から。

【白】 一万円。

【青】 白の紳士、一万円。他にありませんか？ ゴーイングワンス・トワイス：

【緑】 (少し躊躇いながら) 二万。

【青】 緑のご婦人、二万円です。

【緑】 【桃】 【赤】 【黒】、お互いの様子を探りながら…

【桃】 三万円
【赤】 四万円
【黒】 五万円
【白】 十万円。
【青】 白の紳士、十万円。他にありませんか。
【緑】 あの絵に十万？
【桃】 ということはあれも？
【赤】 そういうことだな。
【黒】 間違いない。

オークション、一気に白熱する。

【緑】 二十万。

【白】 ……三十万

【緑】、落札を諦める。

【桃】 四十万。

【赤】 五十万。

【桃】 六十万。

【赤】、落札を諦める。

【白】 ……八十万。

【桃】、落札を諦める。

【黒】 百万だ。

【青】 百万円、黒の紳士から。百万円です。

【白】 百五十。

【黒】 二百。

【白】 三百

【黒】 五百

【白】 一千万。

【青】 一千万です。白の紳士、一千万。

【黒】 ……二千万。

【白】 三千万！

【黒】 四千万！！

【白】 五千万！！！！

【黒】 六千万！！！！！！

【白】 七千万！！！！！！！！

【黒】 一億だ！

静寂。

【白】、あきらめて椅子に座る。

【青】 黒の紳士、一億円。他にありませんか？ ゴーイングワンス・トワイス…

【白】、ワイングラスをテーブルに置く音が響く。

【桃】と【黒】の姿は消え、そこは元通りのレストラン。

【白】 おかしな話です。それが本当にピカソの作品であるかには関係なく、ピカソが落札しようとする作品には、ことごとく高値が付くようになりました。オークションハウスにピカソの偽物が現れ、最後には誰かが「今日はピカソの代理人が来ている」と言えば、それだけで天井知らずの値段がつくようになったと言います。何が本当で、何が嘘か。何が本物で、何が偽物か。何に価値があつて、何に価値がないのか。世の中はわからないことだらけだ。

【白】、ムートンのラベルをしげしげと見て…

【白】 いやいや、楽しませていただきました。やはり、ワインは良い。

【青】 いいんですか、誰が犯人か、はつきりさせなくても。

【白】 いいじゃありませんか。ムートンがなくなりボジョレーになっていた。何故そうなったのか、誰がやったのか。いくら考えても、その真実はわからない。それが答えです。

【青】 それにしても、ワインだけでなく、絵のことにまで詳しい。

【白】 実は、昔、絵描きの真似事のようなことをやっております。

【赤】 やっぱり。そんな気がしました。

【青】 どうりでお詳しいはずです。

【緑】 ジバニャン描いて。

【白】 お安いで。

キュビズム的で芸術的なジバニャン完成。

【緑】 すごい、芸術的。

【青】 これは、なかなか。

【赤】 レベルファイブに怒られませんか、これ。

【緑】 【白】に 有名なの？

【白】 若い頃はまったく売れませんでした。まるで【赤】に今のあなたのようにでした。じゃあ、そのあと売れるように。

【白】 いえ、若いと言えない年になっても、まるで売れませんでな。やたら甲斐性のある嫁さんに養ってもらいながら頑張りました。

【赤】 じゃあ、わりと遅咲きな感じで売れるように？

【白】 なりませんでした。中年を過ぎてても鳴かず飛ばずで。

【青】 え？

【白】 なんとかして飯を食うために始めたラーメン屋がたまたま評判になりました。

【緑】 なんてお店？

【白】 どれんどんこげんどん。

【緑】 なんか、聞いたことある！

【白】 ラーメン屋が忙しくなりすぎて、画家の方は開店休業状態に。

【赤】 すごい。実業家じゃないですか。

【白】 ラーメン屋を始めるときには、ビタ一文貸してくれなかった銀行が、手のひらを返したように、ご用はありませんか、いくらでも貸しますよと言ってくる。私自身は何も変わっていないのに、売れない画家が繁盛店のオーナーというラベルに変わっただけで、私につく値段が変わるんです。

【緑】 そりやそうでしょ。

【白】 ラーメン屋があんまり繁盛するもんだから、調子に乗って銀行からお金借りて、自社ビル立ててそこでワインバーとかもはじめちゃいました。

【緑】 さらに儲かっちゃったんだ。

【白】 いいえ。オープンしてまもなく、店を任せていたソムリエが売上と在庫の高級ワイン全部を持ち逃げしまして。

【青】 それは災難。

【白】 時期を同じくして、ブームが終わったのかラーメン屋の方も売上急下降。おかげで店も首も回らなくなりまして。自社ビルとラーメン屋の権利は人に売って、ワインバーの方は、引き取り手が見つかるまでやむなく私がソムリエの真似事をすることに。

【青】 なるほど、それで色々ワインにお詳しいわけですね。

【白】 店に、歴代のムートンのラベルを並べたポスターがありましたね。シャガール・ウオーホル・キースヘリング、そしてピカソ。目を疑いました。73年のラベルのこの絵。私が昔描いた絵によく似ているじゃありませんか。

【赤】 え？

【白】 まだ、私が若かった頃。どこの誰とも知れないような画商崩れの男に、画材代にもならないような金額で売りとばした絵によく似ていました。いや、似ているなんて言葉ではおさまらない。そっくり同じだった。

【赤】 【青】 【緑】、【白】 の話を本気か冗談か測りかねている感じ。

【赤】 あ、ああ、そうなんですか。

【白】 元々は海に裸で飛び込む三人の絵なんです。

【緑】 え、この絵の青い部分って海なの？

【白】 私のつけた題名は「青いサンゴ礁の青春」です。ダサい。

【白】 それに勝手に「バックカスの宴」なんていう題名がつけられて、酒の神バックカスが踊っているなんて解釈になっている。神様なんてとんでもない。このあごのしやくれたやつは私の幼馴染がモデルなんです。

【青】 少しお酔いになっていらっしゃるのでは？ お水でもお持ちしましょうか？

【白】 いや、結構。皆さん、年寄りが急に何か変なことを言い出したと思っておるのでしょうか？

【赤】 いえ、そんなことは。

【緑】 多少思ってます。

【白】 それはそうでしょう。「AKB48の歌詞を書いたのは秋元康じゃなくて全部俺だ！」と言いつ出人がいたら、私でもドン引きします。しかし、そのような噂は音楽や小説に限らず常にどこにでもある。どこの誰ともしれないような男が作るより、その方が価値があるからです。

二択です。あなたがワインを選ぶなら、どちらを選びますか？ 有名なワインの腐ったものと、無名だが素晴らしいワイン。

【青】 それはもちろん、無名だが素晴らしいワインでしょう。

【赤】 僕もそっちを選びます。

【緑】 あたし両方。

【白】 どちらか片方では？

【緑】 じゃあ美味しい方。

【白】 もちろんそうでしょう。しかし悲しいかな、ワインは飲んでみなければ、その良し悪しが分からない。実際には、有名なワインと無名なワイン、どちらを選ぶかという二択になってしまう。するとどうでしょう。みな、とたんに有名なワインを選び、飲み、素晴らしいと言う。本当は腐っているのに。
なるほど。

【青】 ならば、無名だが素晴らしいワインに、有名なワインのラベルをつけてみたらどうでしょう。皆はそれを選び、飲み、本当に素晴らしいと絶賛する。本人の作った駄作よりも、別人の作った傑作のほうをね。

静かな間。

【赤】 じゃあ、本当にこのラベルのピカソの絵はあなたが…

緊張感のある間。

【白】 …だったら面白いと思いませんか？

【白】、笑う。

【赤】 え？

場の緊張が一気にほぐれる。

【青】 ですよー！

【緑】 あー、ドキドキした。

【赤】 なんだ。そうですか。

【青】 もしも本当だったら世界の美術史が引っくり返るような大事件ですよ。

【白】、しかし否定も肯定もしない。

【白】 いやあ、笑った笑った。…やはり、ワインはいい。

【青】 いやいや、面白いお話でした。

【緑】 どの辺までが本当で、どの辺からが嘘？

【白】 さて、どうでしょうか。…ああ、そうだ、思い出しました。ほら、あの古いワインの話。

【青】 古いワインには三つある、という？

【白】 そう、それです。古いワインには三つある。一つは長い時を経て熟成した素晴らしいワイン。一つは、ただ古くなっただけのワイン。そして最後の一つは、腐ったワインだ。

【青】 なるほど。スタートは同じワインでも、年を経る中で熟成するものもあれば、あまり変化のないものもある。そして中には腐ってしまうものもある。そういうことですね。

【赤】 なんか、深いですね。

【緑】 そうかな。そのまんまじゃない？

【白】 そして、この言葉にはもう一つ続きが。

【青】 それは？

【赤】 どんな言葉なんですか？

【白】 それはですな…

【青】 なんですか、もったいつけて。

【白】 その言葉は…

【緑】 その言葉は…さん、はい！ どうぞ！

【白】 …忘れてしまいました。

一同、笑う。

【白】 さあ、みなさんで乾杯しましょう。幸いまだムートンは十分なほど残っている。

【青】、手際よくワインをグラスに注ぐ。

【白】 乾杯。

【青】 # 乾杯！

【赤】 # 乾杯！

【緑】 # 乾杯！

陽気な音楽。(ドーベルマン「マシジャ」)
バツカスの宴のように、飲み、楽しむ人々。
静かに暗転。

(シーン3終了)

帽子を深くかぶり、椅子に座っている【黒】。
テーブルの上には無造作にキャンバスが散乱している。

【緑】、入ってくる。

【緑】

父さん？

【緑】、椅子に座ったままの【黒】の帽子を取る

すつかり髪が白くなった【黒】の姿。

【黒】、ガクリと頭を垂れる。

【緑】

父さん！！

(眼を開いて) …まだ生きとるよ。

【黒】

そうやって椅子で寝るのやめてよね。紛らわしいから。

【緑】

娘よ、酒はほどほどにな。

【黒】

寝ぼけてるの？ 私が一滴も飲めないの知ってるでしょ。

【緑】

そうだったかな。

【黒】

誰と間違えてるの。母さん聞いたら、また怒り狂うわよ。

【緑】

…夢を、見ていた。遠い昔の夢だ。

【黒】

どんな夢？

【緑】

なにか、楽しい夢だったような気がするが…忘れてしまった。

【黒】

忘れた、忘れたって、最近そればかりね。

【緑】

…あれ？

【黒】

どうしたの。

【緑】

なんだったかな。

【黒】

だから、どうしたの。

【緑】

忘れてしまった。

【黒】

何を。

【緑】

だからなんだったかな、忘れたのは。

【黒】

何を忘れたのかを忘れたってこと？

【緑】

そうそう、なんだったかな。

【黒】

知らないわよ、他人の記憶のことなんて。

【緑】

そうそう、だから教えてほしいわけじゃないだ。

【黒】

じゃあ一人で静かに思い出せばいいじゃない。

【緑】

何か思い出せそうな気がするんだよ、こうして口に出すと。

【黒】

自分への質問って感じ？

【緑】

そんな感じかな。

【黒】、口をモゴモゴと…

【黒】

あ。か。さ。た。な。

【緑】

何言ってるの？ ついにボケた？

【黒】

思い出そうとしておるんだよ。何を忘れたのか。…あ…違う。か…違う。さ…

これも違う。

【緑】

…まだ思い出せないの？

【黒】

何かを忘れてしまったことは覚えている。それが忘れてもいいことなのか、それとも忘れてはいけないことなのかも忘れてしまった。それはお前に関わりがあるかもしれないし、まったくないかもしれない。ただ、思い出さなければいけないような、そんな気がするんだ

【緑】

忘れてしまったのに、どうしてそう思うの

【黒】

…なんとなく、だよ。

【緑】

ふうん。

【黒】

あ。か。さ。た。な。は。ま。や。ら。わ。わ？ …そうだ、ワインだ！ ワ

【緑】

インだよ、パロマ。

【黒】

その名前で呼ばないで。今はいいけど人前では絶対に呼ばないで。羽を生やして飛んでいきたくなるくらい恥ずかしいから。

【黒】

男爵からご注文いただいた絵、ほら、ワインのラベルにするとかいう。

【緑】

それならちゃんと準備してます。で、結局どっちにするの。

【黒】

どっちとは？

【緑】

白っぽい方と、黒っぽい方。どっちにするか、まだ決めてないんですよ。

【黒】

ああ、ああ、そうだったそうだった。

【緑】

どっちにするの？

【黒】

どちらともいえない。

【緑】

なにそれ。

【黒】

どちらのようでもあり、どちらも違うようでもあり。悩ましい。

【黒】、他の選択肢を探して、あたりのキャンバスをひっくり返す。

【黒】

…これは？

【緑】

知らない。父さんの絵でしょ？

【黒】、手に取った「バックカスの宴」の絵をしげしげと見つめ…

【黒】

これは、どちらだったか。私が描いたのか。それとも。

静かな間。

【黒】

…うむ。これにしよう。この絵は、私よりも、私らしい。

【黒】、その絵を手には…

【黒】 パロマ。これを男爵のところへ。

【緑】 (受け取って) 題名は？

【黒】 そうだな。…「バツカスの宴」とでもしておこう。

【緑】、絵を届けに去る。

【黒】、椅子に深く腰掛け、目を閉じる。

オークションハンマーが打ち鳴らされる音。

登場したオークションニア(【桃】)が、うやうやしく一礼。

オークション台の上に、シャトームートンロートシルト73年。

【白】【赤】【緑】【青】も会場に姿を現す。

【桃】

それでは、本日最後のオークションです。たいへん興味深いワインを2本、セツトでご用意いたしました。一本はご存じボルドーの五大シャトーの一つ、シャトームートン・ロートシルト73年。それまで二級の格付けに甘んじていたムートンが、ついに一級に昇格した年の記念すべきワインです。二級時代のラベルには、「二級にはなれないが、二級の名には甘んじられぬ、余はムートンなり」という、中身は一級に決して負けないという反骨心が。そして一級となったこの年のラベルには「余は一級であり、かつては二級であった。ムートンは不変なり」という、他人がどう評価しようとも、一級に値するワインを作り続けてきたという誇りが刻まれています。

ワインのラベルにはパブロ・ピカソの「バツカスの宴」。肝心のワインの質については、口の悪いワイン評論家に言わせれば、このワインは中身よりもラベルとその歴史に価値があると言われる程度の代物です。そのもつとも価値があると言われるラベルには、もちろん傷も汚れもごさいません。かの世界的ワイン評論家、ロバートパーカーによる採点、パーカーポイントは100点満点の65点です。そして、もう一本、ル・プティ・ムートン・ド・ロートシルト2009年。ムートンと同じ畑、同じシャトー、同じ樽で造られながらも、ムートンにはなれなかったいわゆるセカンドワインです。しかしながら、パーカーポイントは本物をはるかに上回る99点。ワインの価値とは何か、そんなことに思いを巡らせながら、飲み比べてはいかがでしょうか。

(改めて) 本日のラストオークションは、シャトームートンロートシルト73年。年にもよりますが多くて30万本、少なければ15万本程度しか作られず、とくに飲みつくされていてもおかしくないこのワイン。それなのに四十年経った今でも、常に世界のどこかで売られているという、世にも不思議なワインです。…これが何を意味するかは、皆様のご想像にお任せいたします。それでは、どうぞ。

【桃】、入札を促すように手を差し出す。

音楽。

静かに、白が舞台を染めはじめる。

【赤】 パプロではじまりピカソで終わる、長い長い呪文のような名前の男。

【緑】 その長い名前の数ほどの違う顔と作風を持つ、天才かキチガイかヤ山師かペテン師。

【青】 勇敢にも、平和を求める絵を多く描き、それでも決して自らは戦うことのない臆病者。

【桃】 人としては臆病者だったかもしれないが、表現者としては勇敢だった。

【赤】 時に寡黙で、時に饒舌。

【緑】 時に冷酷で、時に情熱的

【青】 時に建設的で、時に破壊的。

【桃】 狂気と紙一重の表現者。

【赤】 誰かは君に価値を認め、

【緑】 誰かは君に価値を認めないかもしれない。

【青】 何が本物で、何が偽物か。

【桃】 何に価値があり、何に価値がないのか。

【赤】 何が正しくて、何が間違っているのか。

【緑】 ピカソが描こうとしたキュビズムのように、世界はいつも多面的でいつも違う表情を見せる。

【青】 今日の平和は明日の争いに変わり

【桃】 今日の価値は、明日には無価値に。

【赤】 反転するパラダイム。

【緑】 極論と極論の交錯する世界。

【青】 世界はその二極の間で揺れ動き、

【桃】 それでも日々は続いていく。

【白】 キャンバスを一つの色に染めることは、美しい。しかし、同時にそれは恐ろしく退屈だ。違った色の存在を許されない世界は、それは窮屈で退屈に違いない。白か黒かの争いに、たとえどちらが勝ったとしても、そこには灰しか残らない。まるでゲルニカのあの絵のように。

【黒】、静かに目を開き…

【黒】 いくつもの色が混ざり合ってこそ、そこに無限の色合いが生まれる。そして、それはいつか必ず…誰もが望む色になる。

様々な色が混ざり、複雑な色彩を描き出していく。

混ざり合う、色と人。その姿を残像のように残し、暗転。

(幕)